

団地再編 COMPETITION2013 と『南花台スマートエイジング・シティ』団地再生モデル事業 関西大学地域再生センター研究発表会の開催

KSDP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
-Re-DANCHI leaflet-

AUGUST 2015
VOL. 185

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』



関西大学地域再生センター研究発表会



パネリスト：辻村修太郎氏

最優秀賞受賞：重村力氏

河内長野市長賞受賞：三好庸隆氏

優秀賞受賞：塚本文氏

■団地再編 COMPETITION と南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業

2015年1月10日（土）に関西大学先端科学技術推進機構地域再生センターの研究発表会として、「団地再編 COMPETITION2013 と『南花台スマートエイジング・シティ』団地再生モデル事業」が開催された（会場：関西大学東京センター）。本リーフレットは、この研究発表会の内容を記録したものである。

【研究発表会のプログラム】

- 1) 京都府八幡市男山団地「だんだんテラスの目指すもの」
- 2) 団地再編 COMPETITION2013 概要
- 3) 最優秀賞受賞作品の紹介（省略）
- 4) 河内長野市長賞受賞作品の紹介（省略）

- 5) 優秀賞受賞作品の紹介（省略）
- 6) KSDP 提案の紹介（省略）
- 7) 大阪府河内長野市 南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業概要
- 8) ディスカッション
（注）省略した作品内容については、関連リーフレット157、158、159、160、167、団地再編叢書014を参照されたい。

■京都府八幡市男山団地「だんだんテラスの目指すもの」（辻村修太郎氏）

だんだんテラスは2013年11月16日にオープンした。365日オープンの住民が気軽に集まれるコミュニティ拠点として、現在は関西大学の大学院生が中心となって運営を行っている。将来的には住民の自主的な運営を目指している。団地居住者だ

けではなく、周辺地域や八幡市以外から来られる方もいる。

だんだんテラスは次の4つの事業を行っている。①365日集まれるコミュニティの拠点の運営。②男山地域のまちづくりに関する情報収集。③男山地域のまちづくりに関する情報発信。④課題解決への取り組み。

日々の活動は、開設時から続くだんだん朝市、だんだんバー、朝10時から始まるラジオ体操、住民が企画する教室・講座、行政主催の公開講座などがある。これらの活動や予定は「だんだん通信」で発信している。今後は、現在の居住者が自主的に住戸改修に取り組める仕組みづくりを進めている。

だんだんテラスの大きな魅力は、

365日空いていることである。そこに必ず誰かがいるという安心感がとても重要である。だんだんテラスという場所について、今後も関わる人たちと全員で考えていくのがだんだんテラスの目指しているものである。

■団地再編 COMPETITION2013 概要

団地再編 COMPETITION2013は2013年度から2014年度にかけて行われた。人口減少や高齢化など、社会の抱える問題が表面化しつつある郊外の団地、大阪府河内長野市のUR南花台団地を対象地とし、団地全体の仕組み・空間の再編、新たな暮らしの提案を広く募った。そして、アイデアを社会・自治体・事業主体などに発信・公表し、団地が抱える問題の議論をより深め、新たな展開を促すことを目指した。スケジュールは、2013年11月1日から登録受付を開始し、2014年の5月25日に河内長野市内で二次公開審査会を行ない、最優秀賞1作品、河内長野市長賞1作品、優秀賞2作品、佳作4作品を選出した。

■大阪府河内長野市 南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業概要・河内長野市より（谷ノ上浩久氏）

河内長野市では、南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業を2014年9月



から開始した。昭和50年前後に戸建て住宅を中心とした開発団地を多く作って、それによって急激に人口を増加させてきた市であるため、人口減少率が大阪府下の市のなかでは一番になっている。

南花台は、人口は現在約8700人、ピーク時は約11400人で現在も減少している。高齢化率が25.2%と市の平均値とほぼ同率だが、他の開発団地と比べるとおそらく低い数値で

ある。南花台を市の南部の一つの生活拠点として整備することを目指している。昨年大阪府市医療戦略会議から7つの具体的な提言がなされた。その中の「スマートエイジング・シティ」のコンセプトを元にして、南花台を舞台に、今住んでいる人が住み慣れた場所で安心して快適に住み続けられるまちをめざしていく取り組みである。

総合的にまちづくりを検討するために、医療・産業・活力・子育て・介護・看護・機能を総合的に検討し、それを地域に関わる大学や、企業・団体・地域の事業者等と、連携していく。さらに行政は部局間を横断して関わっていく。このモデル事業で研究したものを、思い切った事業提案として地域に下ろしていきたい。地域に下ろしたときに地域の方々と検討・計画を立てて実施していく。現在は総合研究会を毎月一回実施しており、10月から3回実施した。毎月一回地域ワークショップを実施し、地域のニーズを探っている。

幾つかの柱を共有している。①健康寿命の延伸、元気な住民の活躍の場づくり。②課題解決につながるようなビジネスモデル構築。高齢者の方も生きがいをもって取り組めるもの。③地域の医療・介護・看護の仕組みづくり。④ストック活用。これらを実施しながら、地域の自立継続性の効力を高めていきたい。

今後はワークショップを通じてニーズを把握して、そうしたなかで「南花台まちづくり構想案」を作っていくと考えている。27年度は、いろんな提案事業を地域に下ろして、試験的に実施し、その効果を見ながら、まちづくり構想を作り上げていこうと思っている。28年度以降は本格的に取り組みを実施している。

■大阪府河内長野市 南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業概要・大阪府より（金森佳津氏）

大阪府市医療戦略会議を昨年度開

催して、7つの提言をまとめた。超高齢化社会というのは日本全国の最重要課題になって



いるが、現在880万人の人口を擁する大阪府では急速に高齢化が進み、地方とは違ってボリュームの非常に大きい高齢社会になっている。そこで噴出する課題は、緩やかに高齢化が進んできた地方とは全然違う。大阪府民の健康寿命はワースト1,2,3くらいを常に争っており、10年間に及ぶ非健康あるいは生活に支障がある時代を生きないといけない状況である。これは成長戦略にとっても大きな課題であるし、さらに大阪府市の地方自治体の財政にとっても多大なる負担が予想される。こういう課題意識が最初にあって、これをどう乗り越えるか、健康や医療という観点から議論を行ったものが大阪府市医療戦略会議であり、その流れのなかで健康・医療の問題を縦割りの健康政策や福祉政策で解決するのではなく、地域のまちづくりという住宅政策・都市政策までも幅広く領域として捉えて考えていくことを提言した。これを受けて、河内長野市でモデル地域として郊外開発団地の再生と合わせたスマートエイジング・シティづくりということを行っている。

■大阪府河内長野市 南花台スマートエイジング・シティ団地再生モデル事業概要・株式会社タニタより（猪野正浩氏）

株式会社タニタは健康機器をつかって、人々の健康をどう管理していくかという、ものからひとへ重心を移している。最近タニタの健康管理プログラムというものを進めており、それがある程度効果が出ている。これを昨年くらいから、実際の企業・自治体に提供し始めた。一番最初に取り組んで



いるのが、新潟県の長岡市である。長岡市では、このタニタ健康管理プログラムをフレームにして、新たな健康拠点を作った。さらに、職能と言うよりは新しい業態として、将来的には市街地再開発の中で、我々の新しいタニタ、ヘルススタートアクティビティというものを入れ込んでいこうと思っている。

国土交通省の方が、河内長野の南花台というところは坂道が多いので、坂を使って新しい健康作りが出来ませんかと相談を受た。その次に、谷ノ上さんから弊社へ相談があった時に、ご提案をさせていただいたところ、非常に興味を持っていただいた。その後、大阪府のスマートエイジング・シティのモデルに認定されたことで、今回のメンバーに入っている。

タニタという会社は、メーカーと言うよりは総合機構企業ということで、いろんな健康に関わるソリューションをまちの特徴や健康管理プログラムのフレームに合わせてカスタマイズし、南花台でも提供していきたいと考えている。

■ディスカッション

江川直樹（コーディネーター）

私たちは「団地再生」ではなく「団地再編」として、いろんな仕組みの再編も含めて研究をしている。私たちの団地再編プロジェクトについて説明をして、議論に入りたい。

関西大学団地再編プロジェクトは、文科省の補助事業に基づいて行っている研究活動である。文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業というもので、5年間の事業支援研究補助事業である。大学の中に、戦略的な研究基盤を形成することに対して支援をするプロジェクトである。大学には様々な役割があるが、社会的な第三者的な立場の意味合いの役割もある。このような研究基盤を形成することが、補助事業の大きな目標になっており、それぞれの研究テーマへの回答だけではなく、それを柱

に継続的な研究基盤を作りなさいと言われてる。

近年の社会情勢の中で、今後の集合住宅団地について、それぞれの公的な事業主体だけでは研究費を出して研究することが難しい状況にある。ストックを活用しながら地域も含めてやっていくには、「人」が重要である。そういう「人」は誰なのか。次にこの問題に取り組んで社会をリードしていく若い人材を育てる機会をつくることも、このプロジェクトの大きな課題である。

男山団地では、京都府・八幡市・大学・UR 都市機構の実質的に四者の連携協定で活動を展開しているが、我々としては大学の関わり方として関西大学だけでやる必要はまったくないと思っている。いろんな大学とか、いろんな方々と一緒にやっていくべきものである。男山団地の取り組みは約3年やっているが、連携後ドライブがすごくかかって、いろいろなのが実現している。一番重要なのは、どこから始めるか。今回のコンペでいただいた提案を、どこからスタートさせて、どういうお金で、どういうシステムで、どういうプロセスで、実現していけばいいのか大きな問題である。そこに重点を置いて、議論を進めていきたい。

面白かったのは、今日発表にあった4つの提案とも、屋外空間に視点が置かれていた。これも、今までの制度が作ってきた空間を変える提案であり、制度も変えていく必要がある。

南花台のスマートエイジング・シティの話だが、コンペで皆さんに提案をいただいたときには、この話は全く無かった。昨年7月にこの提案の発表会と作品の展示会を大阪市内で開催したが、その時もスマートエイジング・シティの話は無かった。その後、あつという間にこの話になって、進んでいる。

今日は、優秀提案の重村さんと三好さんと塚本さんには、スマートエ

イジング・シティについてどう思われたのかという点、そしてさらなるご提案やご意見があればお話しただきたい。そして、何から始めるかについて何かご意見がおりなのか。また、折角なのでいい提案をされた方々と一緒にやりたいと思うので、それぞれご意見をいただきたい。

重村力氏（最優秀賞受賞）

スマートエイジング・シティという言葉聞いて感じたのは、人生を通じてトータルに考えることと、住宅地そのものが上手にエイジングしていくこと。たとえば、ヨーロッパでは第一次大戦で壊滅的な廃墟になってしまい、そこから集合住宅をつくった。一番有名なのはブルーノ・タウトがやったジードルンクだが、1920年代に作られて、今世界遺産になっている。もちろんブルーノ・タウトが設計したからデザインレベルも高いが、日本の住宅公団が設計した建物はひどいかというと、それほどひどくも無い。だが、何かが間違っているから、持続的に住む対象にならないし、建物もエイジングしないし、住み手もスマートにエイジングしない。今日の発表の提案も、外部空間を対象にしているのも同じ問題によるもの。ドイツがすごいと思うのは、居住空間を指す「ヴォーンラウム」という言葉があるが、それを外部の環境に対し「アウシェン・ヴォーンラウム＝外部の居住空間」という概念がある。だから、家の外も全然粗末にしない。日本の団地はそうならない。公団団地では以前団地サービスというところが樹木の剪定をしていた。きちんと管理してるかもしれないが、つまらないものになっている。そのため転出する人を出て行く理由が、生活環境として何かが足りないというもの。だけど、南花台だと提案にあるような暮らしができるんだよということになると、出て行く人の半分ぐらいは残るかもしれない。そういう地域的な継続性、

社会的な持続可能性が、スマートエイジング・シティだと思って聞いていた。

何からやれるかという、一階住戸の居住性が悪いのを直し、接地性がメリットになるような改造を行い、外部空間を改造してみて、みんながそれを支持するようなスタイルになる実験をやってみたら良いと思うし、私もお手伝いしたいと思う。それと、奥河内運動を行ってる方々ともお話ししたい。この地域にも活発な活動家がいるみたいで、そういう方々とお話しする機会をつくって、それで本当に何が出来るかを話してみたい。

江川直樹

なぜ、日本はベルリンやウィーンで100年前に出来た集合住宅の団地のようにならないかという、僕たちの研究からかなり言い切れることがある。一つはまちを作ってく要素があるかということ。明らかに街路型で出来てる団地は残っている。特に街区型で出来てる団地は、100年間、ちゃんと住民の人たちがよく使っていて、中庭はみんなで作っている。日本ではレジデンシャルインパーク型でまちから後退して背を向けて作ったことが一つ。だからイギリスではそういった団地が全部街区型に改変されている。日本のストック活用型の場合にはそういうことが出来ないがゆえにちょっと難しい。住棟に、新たな部分を足すことで、沿道性をつくることができると思う。また、住民が参加できる部分があることって言うのはとても大きなこと。持続的にやっていく中で、誰のものか分からない、誰がやってるのか分からないものを特定化して、誰がやってるのか、それは個人なのか共同なのという違いはあるが、できれば個人の方が効果は高い。個人が集まって議論しながら、個人の責任でやるのが効果的である。つまり、空間の問題も大きな課題で、彼らは積極的に直そうとしているということが既

に分かっている。出て行く出て行かないの問題も、ライフステージに応じて地域の中で移り住む。こういう仕組みがあると地域からは出て行かない。

三好庸隆氏（河内長野市長賞受賞）

スマートエイジング・シティの発表があったが、大変すばらしいと感じた。ただ、基本的には暮らしの再編というのはトータルなものなので、ターミナルケア的な印象が出てくるとよくない。行政的にはどこかに焦点を当てる必要があるかもしれないが、ぜひトータルに暮らしを捉えていってほしいし、仕組みもそういうふうにやっていただきたい。

何から始めるのかだが、これは大変難しい問題だが、同時多発的にすべてから始めることが大事である。これは総論だから、もし、少し絞るのであれば、一つは住民参加型。それからあまりお金がかからなくて出来ること。たとえばワークショップとか。それから、コミュニティビジネスは刻々と変わってきている。安倍政権の地方創生では団地再編と重なる部分もあると思う。団地周辺の方々がいきいきしていくためには動かないと駄目。雇用の概念が建築系や都市計画系の人の発想に極めて少ないのが問題だと感じている。たとえば、UR団地の空室を事業者にサブリースして事業者がサービス付き高齢者向け住宅やシェアハウス事業、保育所事業を展開するなど有り得る。現に今、UR × IKEYA(民間企業)で、若者向け住宅をやっておられる。そのような発想から横断的かつ複合的視点からいろんな切り口で事業を押し進めることが大切だと思う。

住民主体の進め方をする一方で、そのようなコミュニティビジネスをテーマとした事業提案コンペを行って、有能なチームには、既成の仕組みにとらわれることなく、どんどん事業チャレンジができる。そのためオープンなプラットフォームを自

治体等の公的機関が、積極的に創ることが求められているのではないか。

もし私に参加するチャンスがあれば、「暮らしの誇りと絆が見える」という私の提案をぜひ具体的に動かしてみたいですね。

塚本文氏（優秀賞受賞）

二つ目のどこから始めるかから話したい。

一番大事なことは地域の人たちがマネジメントしやすくすることに尽きる。それがハード面なのかソフト面なのかはいろいろある。なぜ地域の人のマネジメントが大事かと言うと、このコンペは公的大規模賃貸住宅を対象としており、公的という点でコストの課題が非常に大きいことが明らかである。中でもマネジメントコストが非常に大事になる。このマネジメントコストをどのようにコントロールするかが、結局は団地の持続性につながると考えている。コストの縮減と言っても、単に落とすだけで維持管理の質が下がるので、誰かがマネジメントの役割を担わないといけない。そのときに誰が担うか。企業や大学が入ると思うが、地域住民で手をかけることが必要となる。だんだんテラスの例を見て感じたのは、住民の人が維持管理をやるのが、一見つまらなく見えるが、だんだんテラスの写真ではすごく楽しそうにやっている。住民の人たちがマネジメントに加わる過程が、それ自体が暮らしの中に組み込まれていて、かつ楽しく生きがいになる。このサイクルがあれば、これが循環して、持続的に運営されていくと感じた。

もう一点が、公的大規模賃貸住宅の「大規模」というところ。団地の特徴の一つは、とてもマスの構造になっていること。マスで、かつ全国に同じようなタイポロジーで作られたので、先進事例を一方所作れば全国に広がっていく可能性は持っている。他方でそれは今までと同じやり方でもあって、そこに多様性を入れ

込むことも大事である。その多様性は、河内長野の歴史性をそこに反映させることや、地域のプロフェッショナル的な人にどうやって入っていたか、で多様性が生まれる。

今回スマートエイジング・シティは、その多様性の一つの提案だと感じている。奥河内という言葉があるが、それは地域の人々のいろんな力、そこにしかない資源の力を投じた結果、今のスマートエイジング・シティというプロジェクトが動こうとしている。だから団地の多様な在り方の一つの形態であり、かつ先進プロジェクトの一つだと理解した。エイジングとはどうやって年を重ねていくか、つきつめるとどうやって生きていくかということ。エイジングの仕方にも、多様なやり方が許容される時代になった。

どう関わっていくかだが、私はDIYをやってみたいなと思っている。実際に改修をしてみなさんのすごく楽しそうな写真を見て、私もその中に加わりたい、一緒に鋸を引いてみたいというのが、第一印象である。

江川直樹

男山団地で研究を始めるときに、はじめにやったのは住戸を借りること。当時の院生が住みながら、大学に通っていた。今南花台でも同じことをやろうとしている。マルチハビテーションの考え方で、ストックはいっぱいあるので、みんなで使い回していくことを考えている。

もう一つ、だんだんテラスでは、立ち上げは学生がやるが、将来的には住民がやるということで、住民が自立的にやれるように取り組んでいる。その中で逆に住民の方から意見が出てきて、これは学生とやってるからおもしろいんだと。やはり団地に欠けてるのは、若い世代。なので、もう少し近くの大学なども巻き込み、みんなでやっていく必要があると考えている。

辻村修太郎氏

だんだんテラスのことを話すと、だんだんテラスはまず場所を作って365日開けるというすごくシンプルなどころからスタートした。オープンの日にはイベントを企画したが、その次の日に「次何すんねん」と言う形でスタートした。365日開ける中で、いろんな人と話をし、いろんな人と関係を持って、一年経って、いろんな活動が生まれたという経緯がある。一番重要視しているのは、まずやってみて、失敗したらまた次考えて、考えることを止めないで続けていくこと。その中で面白い発見をした学生がいる。今取り組んでいるラジオ体操にはすごい考え方が潜んでいるという話になった。それは、お金をあまりかけずにずっと長く続けていけるし、例えば高齢者の方はラジオ体操の中にジャンプをするヶ所があるけども、そこはジャンプをする高齢者の方もいるし、リズムを取る高齢者の方もいる。みんなで一緒にことをするけども、自分らしくそれに参加しているということが、これからのまちづくりに繋がっていくような気がしている。

江川直樹

だんだんテラスは毎日開いてないと意味ないということで、辻村君たちに「やるか？」と聞いたら、「やります」と即答だった。本当にやっています。学生諸君は素晴らしいなと、思っている。

猪野正浩氏

大きなテーマは健康寿命を延ばすこと。長岡では多世代健康まちづくりとして、小さい子供からシニアの方まで幅広くやっている。一般の方を対象としたときに、モチベーションを持てるかが大きな課題である。今一番言っているのは、楽しく、簡単に、しかもお得にという3つをコンセプトにしている。参加される方は何千円かの負担をしており、五千

円負担した方は年間五千円以上のサービスを受けられないと納得してもらえない。

タニタマンションを作りましょうという話があった。一番計測しやすいのは共用部分、1階から入ってエレベーターか階段で上がる近くにプロ用の機器を置くこと。動線の中に入れていくことが大事で、そうすると人が自然と集まってコミュニティができる。南花台でもそういうことが出来ればいいと思っている。また、食の側面もある。カフェや食堂があるが、基本的にすべて地元の方にやって頂くようにしている。我々はコンテンツとスーパーバイザーをやるだけ。雇用の創出やセカンドキャリアを活かす仕組みが出来ると思う。

お年寄りの方はみんな元気なんです。だからあまり過保護にしない方がいい。むしろきちっと体の調子分かるようにして、きちっと運動指導をすれば、ずっと健康な体でいられる。まだ一般の方の健康リテラシーは低いので、健康リテラシーが上がれば、健康寿命は延びていくと思う。これからいろんな自治体さんとやらせていただいて、そういう姿勢で取り組んでいきたいと考えている。

江川直樹

お金を出さず関係で思い出したことがある。徳島のひょうたん島という中洲のまわりの新町川がすごく汚れて、川があまりにも汚いので「新町川を綺麗にする会」を作って、会費を三千円取るようにした。会員のメリットは何かというと、川の掃除が出来るというもの。それを10年以上続けたら、本当に綺麗な川になって、川が綺麗になるとまわりのまちが綺麗に見えてくる。川に背を向けていたまちが川の方に向くことになって、住民同士の交流も深まった。いろんな事を考えながら複合的に仕組みを作っていくことがあると思います。

金森佳津氏

2点あります。スマートエイジング・シティという言葉を超高齢化社会の解決にしたいと申し上げているので、高齢者の問題を解決するというふうに捉えられがちですが、先生方が仰ってくださったように、まさに全世代に渡って活力を持っていくことであるので、問題対処療法的にやっても駄目だという思考回路で考えに行く必要がある。それからまちそのもの、大阪も年老いかけている。どんどん寂れていくまちの活力をどう維持していくかを併せて考える必要がある。今日のテーマの公的大規模賃貸住宅団地は、いわゆる分譲で買った方と違って、臨時的にその住民であるという形だったと思う。行政もそのように扱ってきて、特にUR団地や府や行政が関わってる公社団地は、問題が起こったら行政に近いところが自己完結的に解決してくれることを、住まう人も行政も期待してしまっていたと思う。これが今のやり方には全く合わなくなって、今後ダイナミックに再生をして、長く住む良いまちを作るには、行政の側も閉じた空間の中で、UR団地の中で問題を解決するのではなく、具体的な提案をし、地域としてどうやっていくかをしっかりと一緒に考えなければいけないだろうと思う。現在南花台でも、団地の中に住んでおられる方がどれだけこのまちを考えるワークショップに出ただけかというのが、今後の一つのハードルで、それを努力していかねばならないのを感じた。これから、大阪府も一生懸命皆さんのお力を借りてやっていきたいと思う。

谷ノ上浩久氏

今回この事業を立ち上げるのに、上層部に相談する前に大阪府にモデル地区に指定してもらうために動いた。庁内でこの事業が必要だという説明をする際に、重村先生の提案の中に出てくるフレーズをたくさん使わせてもらった。結果、庁内で理解してもらい、なんとかこの事業をやっていくことになり、今は市長も含めてこの事業を多方面で宣伝しながらやっている。そういう意味でも本当に良い提案で、感謝している。特に、外部空間が支持をもらえる空間でないといけない点に共感した。昨日、長岡市の視察に行ったときに、その空間で地域の活動が誰にでも見えるというのが非常に良いと感じた。地域の活動が閉じた部屋の中でされていて、何処でどんな活動をしているのか分からないというのが、今の南花台での課題であると感じた。

次は、三好先生からいろんなことを同時多発的にというお話があった。これは江川先生も当初から、やれることはどんどんやっていくとおっしゃっている。これをやると非常にしんどいんですけど、いろんなことが起こって、それを躊躇無く始めていっているの、その整理が非常に難しい。しかし、それをしっかりと整理しながら、同時多発的にやっていくというのは、この事業の特徴として捉えていきたいと思っている。またコミュニティビジネスで、生きがいをもってやっていき、地域課題の解決に繋げていくことも考えている。自分のまちが、良いまちになることに生き甲斐を感じてもらえるようなコミュニティビジネスが良い。

塚本さんの提案の中で、エイジン

グってという表現を「年を重ねる」という表現でご説明いただきましたが、これは私も同様に考えており、ワークショップでもそのように説明している。エイジングというのは、加齢とか老いるという表現もあるが、そうではなく「年を重ねる」、子供から大人まで年を重ねるといふ成長だと捉え方をしている。子供から大人まで成長できるようなまち、経験が出来るまちというのが今回狙うスマートエイジング・シティであると捉えている。高齢者の方に、エイジングへのイメージを聞いたら、やはり老いるというよう理解が多く、老いたらどうなるかと聞いたら、どんどん体が不自由になるという答えが多い。そうではなく、さらに成長してやれることがどんどん増えるとか、これまでやってきた経験を地域に生かせるとか、そういう捉え方をしてくださいという説明をしている。

最後に、この事業では、地域には優秀でいろいろな経験をされてるプロフェッショナルな方がおられて、これを上手く活用したいと思っている。ただ、いろんな能力をお持ちであるが故に、意見が合わないことや派閥ができていたりする。なんとかこの事業を魅力的な事業にして、そういう人たちが一つになり、地域が一つになれるのも、今回の目的の一つにあるを思っている。本日は本当にいい話をありがとうございました。

江川直樹

今日は会場のみなさんと意見交換する時間がございましたが、これで終わりにしたいと思います。ご登壇の方も聞いてくださった方々も、本当にありがとうございました。

関連リーフレット：157 158 159 160 167

関連団地再編叢書：014

発行：2015年8月

「団地再編 COMPETITION2013 と『南花台スマートエイジング・シティ』
団地再生モデル事業 関西大学地域再生センター研究発表会の開催」

作成：倉知 徹（関西大学先端科学技術推進機構）

（講演：2015年1月10日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究
（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)

URL : <http://ksdp.jimbo.com>